コレクションギャラリー　2023年11月14日(火)～2024年1月21日(日)

超主観空間を考えるⅢ　境界を超える江戸琳派

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法（縦×横 cm）
1：　2次元と3次元の境界を超える					
1	酒井抱一	椿図	19世紀前期 （江戸時代後期）	紙本着色	22.10×16.50
2	酒井抱一	藤の花図	19世紀前期 （江戸時代後期）	絹本着色	100.0×36.2
3	酒井隆	月に葛図	19世紀前期 （江戸時代後期）	絹本墨画淡彩	82.0×34.8
4	鈴木蠣潭	白薔薇図扇面	19世紀前期 （江戸時代後期）	絹本着色	16.0×45.6
5	鈴木其一	紅葉図	19世紀前期 （江戸時代後期）	絹本着色	34.9×97.5
6	濱田観	池	1961（昭和36）年	紙本着色	163.0×97.8
7	濱田昇児	幹	1997（平成9）年	紙本着色	164.0×214.0
2：　画面の境界を超える					
8	酒井道致	兎図	19世紀前期 （江戸時代後期）	紙本着色	55.6×28.4
9	酒井抱一	鬼	19世紀前期 （江戸時代後期）	綿布墨画	98.0×33.1
10	小坂象堂	田舎祭	19世紀後期 （明治期）	絹本着色	73.0×100.0
11	上村松園	花	1910（明治43）年	絹本着色	157.3×72.2
12	松岡映丘	矢表	1937（昭和12）年	紙本着色 （六曲一双）	（各）163.9×369.1
3：　分野の境界を超える					
13	酒井抱一	柳花帖	1819（文政元）年	紙本着色	33.0×23.5
14	酒井抱一	集外三十六歌仙	19世紀前期 （江戸時代後期）	絹本着色	23.7× 21.4
15	酒井抱一	播磘室明神々事棹歌之 游女行列図	1821（文政4）年頃	絹本着色	26.8× 101.2
16	森崎伯霊	朝涼	1960（昭和35）年	紙本着色	82.0× 92.2
17	池田遙邨	おとなりも寝たらしい 月の澄むほどに 山頭火	1988（昭和63）年	紙本着色	65.0× 89.8

本展要旨

本展は、当館企画展「チームラボ 無限の連続の中の存在」（会期 7 月 22 日～2024 年 1 月 21 日）の関連企画第 3 弾です。本展は、チームラボが提唱する「超主観空間」というものの見方、考え方を通して、伝統的な日本美術作品、とりわけ姫路と縁の深い江戸琳派作品を見てみようと試みるものです。

実は、「超主観空間」について、チームラボは、東洋古典絵画の空間構成に着想を得たものであると述べています。中でも、酒井抱一を始祖とする江戸琳派は、画面というフレームに捉われない作品空間や、２次元性と３次元性を両立させる画面構成など、「超主観空間」との共通項を端的に見出せる画派と言えます。本展ではさらに、美術史上で江戸琳派に位置づけられるかどうかにかかわらず、時代・様式を超えて江戸琳派的な要素を持つ作品を選びました。江戸琳派と超主観空間に共通する境界を超える試みについて、多様な作品を通じて紐解きます。

各章解説

[１：2 次元と 3 次元の境界を超える]

江戸琳派の特徴の一つに、平面性や装飾性と写実性の両立が挙げられます。一見相反する性質とも思える平面性・装飾性と写実性が画中に同居する江戸琳派の作品は、描かれた一つ一つの物事にリアリティを与えながらも、奥行きや物事の位置関係などの空間構造を厳密に規定しません。

そうした、平面性・装飾性と写実性を両立させる江戸琳派の特徴は、言い換えると 2 次元的な表現と 3 次元的な表現を融合させているとも言えます。これは、チームラボが「超主観空間」で用いている、デジタル上に 3 次元で作品空間を作り、その 3 次元空間を 2 次元化するという技法とも共通する画面構成です。

[２：画面の境界を超える]

江戸琳派の作品では、しばしば画面の中だけでは完結しない構図がとられます。画面という枠の外に存在する作品空間を意識して構成された構図は、画面に描かれない部分を鑑賞者に想像させます。そして、その画面の外の作品世界がどこまで、どのように広がっているのかについては、鑑賞者の主観的な想像に委ねられています。つまり、鑑賞者が作品に没入し自身の想像によって作品空間を拡張することでより豊かな鑑賞体験を得られる作品とも言えます。そうした鑑賞体験は、チームラボの「超主観空間」で重要な、「絵を見ながら、絵の中に入り込む」という体験と類似のものと言えるでしょう。

[３：分野の境界を超える]

江戸琳派の始祖である酒井抱一は、俳諧師としても活躍しました。俳諧は、数人で句を詠み繋げる文芸で、前後の句との繋がりの余地があること、つまり、詠まれていない情景や詠み人の心情を他者に想像させることが重要です。

そうした俳諧の特徴は、江戸琳派が得意とする、余情・余韻を感じさせる表現に影響を与えており、江戸琳派には、細やか且つ印象的な一瞬を切り取り、その音までも想像させるような作品が散見されます。

文芸と絵画という枠を超え、俳諧の要素を巧みに絵画表現に取り入れた抱一の作品制作の姿勢は、様々な専門領域を横断的に取り入れて作品を生み出すチームラボの創作スタイルにも通じます。

作家解説

[酒井抱一]　1761～1829
江戸神田小川町に生まれる。兄は姫路藩主酒井忠以。本名忠因。37 歳のとき出家し、絵画のみならず書画、俳諧と諸芸に通じた。絵は初め狩野派に学び、南蘋派、浮世絵、土佐派、円山派など諸派を遍歴し、尾形光琳の作品に出会い、これに私淑した。その画風は、宗達、光琳から受け継いだ日本的な装飾性の中に、文化文政期の江戸の粋人らしい繊細な感覚を織り交ぜ、詩情豊かな画面を作り上げている。

［酒井　隆］　1789～1825
遠江国横須賀藩西尾家 7 代忠移の娘として生まれる。姫路藩酒井家 4 代忠実の正室となる。忠実は叔父にあたる抱一と交流が深く、しばしば「玉助」の名前で抱一の俳句集『軽挙館句藻』に現れる。隆姫も抱一から俳諧や絵画を習ったと思われ、「濤花」の俳号を譲り受けたことが同書から判明している。また、絵画を嗜む際は「紅芝」とも称した。琳派風の画題や技法が見て取れ、絵画制作を好んだ酒井家の一員らしい画技への関心と琳派への傾倒を示している。

[鈴木蠣潭]　1792～1817
酒井抱一の最初期の弟子で、鈴木其一の兄弟子にあたる。出自不詳。酒井家御殿医で等覚院御付の鈴木藤兵衛の養子となり、藤兵衛死去にともない、鈴木家の家督を継ぐ。1815 年、『江戸当時諸家人名録』に画家として掲載されるも、狂犬病により没する。家督は鈴木家の養子となった其一に引き継がれる。早世したため作品の数が極端に少ないが、抱一の用人として活動し高い実力を備えていたことが窺える。

[鈴木其一]　1796～1858
江戸中橋に生まれる。本名元長。紫染職人の家に生まれたとされるが、武士の生まれとする記録もあり、生年も 1 年早い説がある。1813 年抱一に入門。4 年後に兄弟子の鈴木蠣潭の急死を受け、鈴木家の跡目を継ぎ、酒井家家臣となる。多くの抱一門弟の中でも特に優れた画才を発揮、早くから師抱一の厚い信頼を得ていた。抱一が没して以降は、一門の中でも圧倒的な存在感を示し、多くの弟子を育成して江戸琳派の存続に大きく貢献した。

[濱田　観]　1898～1985
姫路市に生まれる。本名仙太郎。大阪に出て商業デザインの仕事をするかたわら信濃橋洋画研究所に学ぶ。1929 年京都に移り竹内栖鳳に師事。1933 年の第 14 回帝展で《八仙花》が初入選。1941 年京都市立絵画専門学校研究科を卒業。戦後は日展を中心に活躍し、1964 年《彩池》で日本芸術院賞を受賞したのをはじめ数々の賞を受賞。花鳥画を得意とし、東洋的な幽玄味のある絵画世界を創出した。1984 年より日本芸術院会員。姫路市展の審査委員長も務めた。

[濱田昇児]　1927～
京都府に生まれる。父は濱田観。1951 年京都市立美術専門学校研究科を修了、小野竹喬に師事。1951 年以来、日展を舞台に発表を続ける。1971 年より委嘱出品、74 年には審査員を務め、75 年日展会員となる。風景を得意とし、厚みのある色彩と油彩にも通じるマチエールで、雄大な自然の美しさを描き出している。

[酒井道致]　1816～不詳
姫路藩酒井家 3 代忠道の子として生まれる。兄は同 5 代忠学。1837 年に相模国高井但馬守式房の養子となり、相模守に任ぜられる。その後の経歴は不詳。名前の正確な読みも不明である。残された作品を見ると、琳派的要素の強い作品である。

[小坂象堂]　1870～1899
豊岡市に生まれる。本名力松。京都府画学校中退。京都で陶器の絵付けをしながら日本画を学ぶ。1892 年上京して日本青年絵画協会展、日本絵画共進会展などで受賞、橋本雅邦や寺崎広業らを知る。また一方、1896 年より浅井忠に洋画を学び、明治美術会展出品、98 年には東京美術学校西洋画科の浅井教室の助教授となる。その日本画作品は、多分に西洋絵画を摂取した水彩風のもので、将来を嘱望されていたが、30 歳の若さで夭逝した。

[上村松園]　1875～1949
京都府に生まれる。本名津禰。1887 年京都府画学校に入学し、鈴木松年に学ぶ。翌年松年の画学校退職と共に同校を退学し、松年の塾生となる。その後幸野楳嶺、竹内栖鳳門下となる。各師の画風はもとより、江戸の風俗画、浮世絵などにも学ぶ。1941 年帝国芸術院会員となる。一生美人画を追求し続けた松園の描く女性はどれも理想的で清澄なものである。1948 年女性として初の文化勲章を受ける。日本画家上村松篁は実子である。

[松岡映丘]　1881～1938
神崎郡福崎町に生まれる。本名輝夫。民俗学者柳田國男は実兄。最初狩野派の橋本雅邦に学んだが、大和絵の研究を志して住吉派の山名貫義の門に入った。1899 年東京美術学校日本画科に入学、04 年首席で卒業した。1908 から 35 年同校で教鞭をとり、現代日本画壇を代表する作家を次々と世に送り出した。この間文展、帝展に出品し度々特選を受賞、審査員も務める。伝統的な大和絵に近代的な性格を付与し、新しい大和絵を創造した功績は大きい。

[森﨑伯霊]　1899～1992
姫路市に生まれる。本名寅義。義務教育終了後、次第に絵画に興味を示す。20 歳の時本格的に絵画の勉強に専念すべく京都に出たが、良き師に巡り合えず、2～3 年の間姫路との往来を繰り返し独学する。その後は郷土に根を下ろし農業のかたわら絵筆をとり、日本美術院を中心に作品を発表し続け、独自の画風を育んだ。郷土を題材にした牧歌的な作品が多く、大自然で働く農民の素朴な姿には自然との温かい交流が感じられる。

[池田遙邨]　1895～1988
岡山県に生まれる。はじめ松原三五郎の天彩画塾で洋画を学ぶ。兵役除隊後父の仕事の関係でしばらく姫路に住む。この頃日本画への転向を考え、1919 年竹内栖鳳の竹杖会に入門。1921 年京都市立絵画専門学校に入学。1928 年第 9 回帝展で特選を得て以降、官展の中心的作家として活躍。1936 年から 49 年まで母校で教鞭をとる。1953 年画塾青塔社を結成、主宰。自由な発想に基づくユーモアのある作風で、日本画に独自の境地を開いた。1987 年文化勲章受章。